

## 1 はじめに

LR 統計量はバートレット補正可能であることが知られているが, Wald 統計量, Rao 統計量 (別名 Lagrange-multiplier (LM) 統計量) など多くの統計量は一般的にバートレット補正可能ではない. 実際, 帰無分布のカイ 2 乗型の漸近展開はしばしば  $P(S \leq x) = G_f(x) + \frac{1}{n} \sum_{\ell=0}^k \pi_\ell G_{f+2\ell}(x) + o(n^{-1})$  の形をするが, LR 統計量のようにバートレット補正可能である統計量  $S$  は  $k = 1$  の場合である.  $k \neq 1$  に対しては定数補正では  $n^{-1}$  の項を消すことはできないが, 多項式の補正統計量  $S^{CF} = S(1 - \frac{1}{n} \sum_{\ell=1}^k \hat{c}_\ell S^{\ell-1})$  により  $P(S^{CF} \leq x) = G_f(x) + o(n^{-1})$  とできるような係数  $c_1, \dots, c_k$  が  $\pi_0, \pi_0 + \pi_1, \dots, \sum_{\ell=0}^{k-1} \pi_\ell$  から唯一定まることを Cordeiro and Ferrari (1991; Biometrika) が示し, Kakizawa (1996; Biometrika) はさらに単調な多項式による補正統計量  $S^{mon}$  を考察した.

ところで, Cordeiro and Ferrari (1991) と同じ時期に Chandra and Mukerjee (1991; JMA) と Taniguchi (1991a, b; Springer, JMA; 正規 ARMA モデルを念頭にした一般漸近理論であり, 同じ手法は IID モデルでも議論される) は  $p = 1$  の場合に補正統計量の提案をした. ここでの補正とは, 与えられた漸近カイ 2 乗型の検定統計量に対し (i) 対数尤度微分の情報 (ii) 最尤推定量の情報を取り入れることから, 帰無分布の漸近展開の  $n^{-1}$  項を消失させることを意味する. 本報告の目的は後者の Taniguchi (1991a, b) のアプローチを  $p > 1$  なる単純帰無仮説の場合に拡張することである. Chandra and Mukerjee (1991) は最終節にて多母数の場合に Rao 統計量のみを考察しているが, 彼らとは違う補正統計量が存在することも指摘する.

本報告は途中経過報告であり, 進展がみられたら別の機会に報告したいと思う.

## 2 記号

$d$ -次元の密度関数モデル  $\mathcal{P} = \{f(\mathbf{x}; \boldsymbol{\theta}) : \boldsymbol{\theta} \in \Theta \subset \mathbf{R}^p\}$  の対数尤度関数を  $\mathcal{L}(\boldsymbol{\theta}) = \sum_{i=1}^n \log f(\mathbf{x}_i; \boldsymbol{\theta})$  とし, 単純帰無仮説  $\boldsymbol{\theta} = \boldsymbol{\theta}_0$  を検定したい.  $\boldsymbol{\theta} = (\theta^1, \dots, \theta^p)'$  に関して微分可能な任意の関数  $\Psi(\boldsymbol{\theta})$  の  $s$  階の偏微分を  $\Psi_{j_1 \dots j_s}(\boldsymbol{\theta}) = (\partial/\partial \theta^{j_1}) \dots (\partial/\partial \theta^{j_s}) \Psi(\boldsymbol{\theta})$  と書き, 以下  $\boldsymbol{\theta} = \boldsymbol{\theta}_0$  で評価されたとき,  $\boldsymbol{\theta}_0$  は省略する.  $\ell(\boldsymbol{\theta}) = \log f(\mathbf{x}; \boldsymbol{\theta})$  の微分  $\ell_{j_{11} \dots j_{1R_1}}, \dots, \ell_{j_{\nu 1} \dots j_{\nu R_\nu}}$  の積の (帰無仮説の下での) 期待値を

$$\mu_{j_{11} \dots j_{1R_1}, \dots, j_{\nu 1} \dots j_{\nu R_\nu}} = E \left[ \prod_{i=1}^{\nu} \ell_{j_{i1} \dots j_{iR_i}} \right] \quad (\text{一般性を失うことなく } R_1 \geq R_2 \geq \dots \geq R_\nu)$$

と書く. 微積分の順序交換可能な条件下で  $\mu_{j_1} = E[\ell_{j_1}] = 0$  となるが, これをさらに繰り返し微分して, いわゆる Bartlett identity が成り立つ;  $n^{-1}$  の漸近理論では  $\mu_{j_1 j_2} + \mu_{j_1, j_2} = 0$ ,  $\mu_{j_1 j_2 j_3} + \langle 3 \rangle \mu_{j_1 j_2, j_3} + \mu_{j_1, j_2, j_3} = 0$ ,  $\mu_{j_1 j_2 j_3 j_4} + \langle 4 \rangle \mu_{j_1 j_2 j_3, j_4} + \langle 3 \rangle \mu_{j_1 j_2, j_3 j_4} + \langle 6 \rangle \mu_{j_1 j_2, j_3, j_4} + \mu_{j_1, j_2, j_3, j_4} = 0$  に注意する.  $p \times p$  行列  $(\mu_{j_1, j_2})_{j_1, j_2=1, \dots, p}$  の対称な square-root matrix (一意に定まらない) を 1 つ固定し, それを  $(i_{j_1, j_2})_{j_1, j_2=1, \dots, p}$  とおく. このとき, 逆行列  $\{(i_{j_1, j_2})_{j_1, j_2=1, \dots, p}\}^{-1}$  を  $(i^{j_1, j_2})_{j_1, j_2=1, \dots, p}$  と書く. そして, Einstein の表記法に従い

$$\mu_{(j_{11} \dots j_{1R_1}, \dots, j_{\nu 1} \dots j_{\nu R_\nu})} = \left( \prod_{k=1}^{\nu} \prod_{r=1}^{R_k} i^{j_{kr}, j'_{kr}} \right) \mu_{j'_{11} \dots j'_{1R_1}, \dots, j'_{\nu 1} \dots j'_{\nu R_\nu}}$$

を定義する. さらに,  $s$  階の対数尤度微分の規準化された基本統計量を

$$Z_{(j_1 \dots j_s)} = \frac{1}{n^{1/2}} i^{j_1, j'_1} \dots i^{j_s, j'_s} (\mathcal{L}_{j'_1 \dots j'_s} - n \mu_{j'_1 \dots j'_s})$$

とおく.

### 3 $p > 1$ で単純帰無仮説の場合の 2 次検出力について

帰無仮説  $\theta = \theta_0$  に対する (LR 統計量, Rao 統計量, Wald 統計量を含む) 検定統計量のクラス  $S^\Gamma = \mathcal{U}_a^\Gamma \mathcal{U}_a^\Gamma + o_p(n^{-1/2})$  を考える. ここに,  $\mathcal{U}_a^\Gamma = Z_{(a)} + n^{-1/2}(\gamma^{[1]} Z_{(ab)} Z_{(b)} + \Gamma_{abc}^{[2]} Z_{(b)} Z_{(c)})$  の特別な場合である Rao 統計量は  $\gamma^{[1]} = \Gamma_{abc}^{[2]} = 0$  に対応する. 本報告の 1 つの結果として Taniguchi (1991a, b) の多次元版を示した. すなわち, 統計量  $S^C = \mathcal{U}_a^C \mathcal{U}_a^C + o_p(n^{-1/2})$  が与えられたとき, 局所対立仮説  $A: \theta_n^a = \theta_0^a + n^{-1/2} i^{a,a'} \varepsilon_{a'}$  の下でのキムラント  $cum_{a_1}^{*C} = \varepsilon_{a_1} + \frac{1}{n^{1/2}} \kappa_{a_1}^{*C} + o(n^{-1/2})$ ,  $cum_{a_1, a_2}^{*C} = \delta_{a_1 a_2} + \frac{1}{n^{1/2}} \kappa_{a_1, a_2}^{*C} + o(n^{-1/2})$ ,  $cum_{a_1, a_2, a_3}^{*C} = \frac{1}{n^{1/2}} \kappa_{a_1, a_2, a_3}^{*C} + o(n^{-1/2})$  について, もし  $k_{a_1, a_2, a_3}^{*C} = 0$  ならば

$$P_A[\mathcal{U}_a^{C(1)} \mathcal{U}_a^{C(1)} > x] = 1 - G_p(x; \varepsilon' \varepsilon) + \frac{1}{n^{1/2}} \sum_{\ell=0}^2 \pi_{1/2, \ell}^\varepsilon G_{p+2\ell}(x; \varepsilon' \varepsilon) + o(n^{-1/2}).$$

ここに,  $\pi_{1/2, \ell}^\varepsilon$  は  $c^{[1]}$ ,  $C_{abc}^{[2]}$  に依存しない  $\varepsilon = (\varepsilon_a)_{a=1, \dots, p}$  の 3 次の齊次多項式である. 一般に  $\mathcal{U}_a^\Gamma$  の 3 次キムラントは  $O(n^{-1/2})$  であるが, 次節の ( $O_p(n^{-1/2})$  までの) 方法で統計量を修正すれば, 3 次キムラントは  $o(n^{-1/2})$  となり, 修正統計量の 2 次の検出力は同じになることが示された.

### 4 $p > 1$ で単純帰無仮説の場合の統計量のバートレット型補正について (途中経過報告)

バートレット型補正は  $n^{-1}$  の漸近理論だから, 前節のクラスを  $S = \mathcal{U}_a \mathcal{U}_a + o_p(n^{-1})$  に拡張する. ここに,  $\mathcal{U}_a = Z_{(a)} + n^{-1/2} \mathcal{U}_a^{(1)} + n^{-1} \mathcal{U}_a^{(2)}$ ,

$$\mathcal{U}_a^{(1)} = \gamma^{[1]} Z_{(ab)} Z_{(b)} + \Gamma_{abc}^{[2]} Z_{(b)} Z_{(c)},$$

$$\mathcal{U}_a^{(2)} = \gamma^{[3]} Z_{(ab)} Z_{(bc)} Z_{(c)} + \Gamma_{bcd}^{[4]} Z_{(ab)} Z_{(c)} Z_{(d)} + \Gamma_{abc}^{[5]} Z_{(bd)} Z_{(d)} Z_{(c)} + \Gamma_{abcd}^{[6]} Z_{(b)} Z_{(c)} Z_{(d)} + \gamma^{[7]} Z_{(abc)} Z_{(b)} Z_{(c)}$$

の特別な場合である Rao 統計量は  $\gamma^{[1]} = \Gamma_{abc}^{[2]} = \gamma^{[3]} = \Gamma_{bcd}^{[4]} = \Gamma_{abc}^{[5]} = \Gamma_{abcd}^{[6]} = \gamma^{[7]} = 0$  に対応する. Taniguchi (1991b) の方法によれば最尤推定量の適当なスカラー関数  $\tilde{h}$  を統計量  $S$  に乗じてバートレット補正可能な統計量を導くのだが,  $p > 1$  の場合には必ずしもバートレット補正可能ではないという否定的な結果が示された. そこで, 最尤推定量の適当な行列関数  $H(\cdot)$  を導入することを提案する. すなわち,  $H(\cdot)$  の  $(a, b)$  要素を  $H_{ab}(\cdot)$  とおくと  $S^{\dagger T} = \{H_{aa'}(\hat{\theta}_{ML}) \mathcal{U}_{a'}\} \{H_{aa'}(\hat{\theta}_{ML}) \mathcal{U}_{a'}\}$  の確率展開と漸近展開を計算して,  $(S^{\dagger T})^* = (1 + \rho/n) S^{\dagger T}$  について  $P[(S^{\dagger T})^* \leq x] = G_p(x) + o(n^{-1})$  となるような定数  $\rho$  とスカラー関数  $H_{ab}$  (ただし  $H_{ab}(\theta_0) = \delta_{ab}$ ) の微係数  $H_{ab, j} = H_{ab, j}(\theta_0)$ ,  $H_{ab, jk} = H_{ab, jk}(\theta_0)$  を定める. 実際, 微係数  $H_{aa', j}$ ,  $H_{aa', jk}$  は  $\mathcal{U}_a^{\dagger T} = H_{aa'}(\hat{\theta}_{ML}) \mathcal{U}_{a'}$  の 3・4 次キムラントが  $o(n^{-1})$  となるように選ばれることができる.

注意. (1) 多母数で Rao 統計量に対してのみ提案された Chandra-Mukerjee (1991) 法は統計量  $S = \mathcal{U}_a \mathcal{U}_a + o_p(n^{-1})$  へも応用される:

$$S^{CM} = \mathcal{U}_a^{CM} \mathcal{U}_a^{CM}, \quad \mathcal{U}_a^{CM} = \mathcal{U}_a + \frac{1}{n^{1/2}} M_{abc} Z_{(b)} Z_{(c)} + \frac{1}{n} (M_{ab} Z_{(b)} + M_{abcd} Z_{(b)} Z_{(c)} Z_{(d)})$$

及び

$$(S^{\dagger CM})^* = \left(1 + \frac{\rho}{n}\right) \mathcal{U}_a^{\dagger CM} \mathcal{U}_a^{\dagger CM}, \quad \mathcal{U}_a^{\dagger CM} = \mathcal{U}_a + \frac{1}{n^{1/2}} M_{abc} Z_{(b)} Z_{(c)} + \frac{1}{n} M_{abcd} Z_{(b)} Z_{(c)} Z_{(d)}$$

(後者は, Chandra-Mukerjee (1991) の  $M_{ab}$  の決め方に対する任意性をふまえ, 報告者が指摘した修正である) について  $P[S^{CM} \leq x], P[(S^{\dagger CM})^* \leq x] = G_p(x) + o(n^{-1})$  となるような定数  $M_{ab}, M_{abc}, M_{abcd}, \rho$  が存在する. 実際,  $M_{abc}, M_{abcd}$  は  $\mathcal{U}_a^{CM}$  または  $\mathcal{U}_a^{\dagger CM}$  の 3・4 次キムラントが  $o(n^{-1})$  となるように選ばれることができる.

(2) (1) の修正項で  $Z_{(j)}$  の代わりに  $\mathcal{U}_j$  を用いることもできる.